

令和6年度 第1回 弘前市総合教育会議 会議録

日時 令和7年1月30日(木)
午後3時00分～午後4時10分
場所 岩木庁舎2階 多目的ホール

◇議事日程

- 1 開会
- 2 市長挨拶
- 3 議事

○協議事項

「郷土を愛する心を醸成するためには～地域の特色ある文化財の活用～」

- ①地域の特色ある文化財の活用
- ②市事業を活用する学校の固定化や取組のマンネリ化からの脱却

- 4 閉会

◇出席者

弘前市長 櫻田 宏、教育長 吉田 健、教育長職務代理者 日景 弥生、
教育委員 村谷 要、教育委員 齋藤 由紀子、教育委員 伊東 重豪

◇司会及び説明のため出席した者の職氏名

教育部長 成田 正彦、文化財課長 石岡 博之

◇その他出席した者の職氏名

学校教育推進監 福田 真実、教育総務課長 高谷 由美子、
学校整備課長 高山 知己、学務健康課長 相馬 隆範、
学校指導課長 工藤 利彦、教育センター所長 成田 頼昭、
生涯学習課長 原 直美、中央公民館長補佐 高森 紀之、
博物館長兼高岡の森弘前藩歴史館長 熊谷 義昭

午後3時00分 開会

- 市長(櫻田 宏) 令和6年度弘前市総合教育会議の開催にあたり、ご挨拶を申し上げます。皆様には、ご多用のなかご出席をいただきまして、誠にありがとうございます。また、日頃から、教育行政をはじめ、市政各般にわたり格別のご理解とご協力を賜りまして、厚くお礼を申し上げます。本会議は、教

育のあるべき姿や課題を市と教育委員会が共有し、連携を強めながら教育行政の推進を図ることを目的に開催するものであります。

市では、弘前市総合計画において、「みんなで創り みんなをつなぐ あずましいりんご色のまち」を将来都市像に掲げ、その重要な施策の一つとして「郷土弘前を愛し、自然や歴史・文化財に親しむ心の醸成」を図っていくこととしております。

当市は、岩木山に代表される豊かな自然景観と、大浦城から始まり堀越城、弘前城へと続く、城下町としての町並みや歴史的建造物等が失われずに、良好な状態で保全、活用されている東北屈指の文化都市であります。

弘前城は築城当時の形状をそのままにしています。全国を見渡すと、お堀があると、埋め立てて道路にしている。お城の中の方は、空き地があると建物を建てる。といったことがほとんどですが、弘前の場合は30のお堀をはじめ、築城当時の形状が残されてきた貴重な財産であります。

また、地域に根づいた身近な文化資源や伝統芸能、伝統行事も数多く残っており、これらの保存活用を通じて、子どもたちの郷土を愛する心を育み、弘前の未来を支え創る人材を育成するための教育環境づくりに取り組んでいるところであります。

本日の会議では、市の取組の更なる推進を目指し、「郷土を愛する心を醸成するためには～地域の特色ある文化財の活用～」を協議事項とさせていただき、皆様と率直な意見交換をさせていただきたいと考えております。

皆様からのご意見を参考に、今後も市民の皆様が愛着と誇りを感じ、また、訪れる人の心にも刻まれる街づくりに邁進してまいりますので、なお一層のご理解とご協力を賜りますようよろしくお願いを申し上げます。

本日は限られた時間ではありますが、実りの多い会議となりますよう、お願いいたします。挨拶といたします。どうぞよろしくお願いいたします。

○市長（櫻田 宏） それでは、議事に入ります。協議事項は、「郷土を愛する心を醸成するためには～地域の特色ある文化財の活用～」であります。今回は2つの協議の視点を設定して進めたいと思います。1つ目は「地域の特色ある文化財の活用」、2つ目は「市事業を活用する学校の固定化や取組のマンネリ化からの脱却」であります。まずはこれらについて、事務局から説明をお願いします。

○文化財課長（石岡 博之） 本日の議題であります「郷土を愛する心を醸成するためには～地域の特色ある文化財の活用～」につきましてご説明いたします。

当市は、弘前城をはじめ、多くの文化財を有する東北屈指の文化都市であります。議題を「地域の特色ある文化財の活用」としたのは文化財を国等が指定した文化財だけでなく、それぞれの地域の歴史や文化、風習、祭り、伝統的

な遊びや工芸など幅広く捉え、地域の特色を形成しているこれらの文化資源を学校教育へ活用してもらいたいというものです。

身近にある文化財は、子どもたちにとっては当たり前のもとなっており、大人も含めその魅力や価値に気付いていない人も多く、学校におきましても活用状況に差がある現状にあります。

文化財に関連した学校向けの取組として、教育委員会では資料裏面に記載したさまざまな取組をしてまいりました。取り組みの例といたしましては、別添資料にありますとおり地域の文化財について自らの足で歩いて調べる「文化財マップ事業」や、年齢に応じたクイズ形式で文化財の魅力に気付いてもらおうと実施している出前講座、地域の特色を活用して体験活動を行う「未来をつくるこども育成事業」などがあり工夫を凝らしながらすすめてまいりました。しかしながら、市の事業を活用する学校が固定化するなど、新規参加校が増えず、子どもたちの興味や関心を引き出すための工夫をした取組が必要な学校もあるという課題があります。

郷土を大切にし、将来の弘前を支え創る人材の育成を目指すためには、次世代を担う小・中学生に地域の特色ある文化財を題材とする学びを通して、その魅力や価値に気付かせ、まずは興味の入り口に立ってもらうために、教育委員会としてできる取組につきまして再検討が必要となっております。

説明は以上です。また、ひろさき市学事業で作成している補助資料冊子をお手元に配付しておりますので、ご参考としていただければと思います。

○市長（櫻田 宏） 事務局から説明がありました。ここで皆さんからご意見を伺いたいと思います。

弘前のまちを築いた津軽氏は、鯨ヶ沢町の種里に南部光信公が岩手県の久慈市からおよそ 530 年前に入り、そこで種里城を築きます。これが津軽氏の始祖ということで 4 代 5 代後に津軽為信が岩木山を統一することとなり、岩木山を挟んで、大浦城、堀越城、弘前城を築城して、弘前市の礎を築き、現在まで脈々と、歴史が刻まれて参りました。

その弘前には、多くの歴史的建造物が残されております。昨年、旧弘前偕行社が弘前市の所有となり、教育委員会の所管となりました。今後活用されていくことが大いに期待されるところであります。

一方で、当市は文化資源に溢れた魅力あるまちであります。その魅力が十分に子どもたちや市民に認識されていないという課題もあります。

文化資源は古いものだけでなく、例えば昭和についても、中央弘前の駅舎であったり、土手町の商店街など、昭和の現存する建物なども未来へ繋がる文化財となっている可能性があり、今を学べば将来も見えてくると思います。

また、昨日から埼玉県で発生した下水道管の漏えいからの地盤の沈下、イ

ンフラ整備についても、学ぶ必要があると感じていました。

というのは、ちょうど私、一昨日、インフラメンテナンス市区町村長会議の東北ブロック会議に出席をしてきたところです。今、しっかりと維持していくという、保全予防という形で取り組んでいくことは、実際に事故が発生してから復旧にかかる金額の、もう半分ぐらいで済むのですよね。この考え方が、国土交通省の方では推進していきたいということで、全国の自治体が加入しているインフラメンテナンス市区町村長会議です。これに弘前市が参加して、その考えに基づいて進めていかなきゃいけないというのも、今のこの次の時代、その次の時代の子どもたちに、資源として財産として残せるのか、負の財産となるより、途中で事故が起きるっていうことをやっていくのではなく、今の段階からしっかりと保全予防をしないと、その負担というのは将来の子どもたちがしていくことになるということでもあります。

そういうことを含めて、歴史文化だけでなくインフラ整備も、それも財産と考えた中で、皆さんといろいろな意見を出していければと思います。

まず1つ目の協議の視点として、そうした中の地域の特色ある文化財を活用してもらうための方策等について、まずは皆さんからお話を伺いたと思います。

○教育長（吉田 健） 今回、文化財が中心ということですが、先ほど市長から話がありましたけれども、インフラのことも含めて、相通じるところがあると思っています。

今回のこの文化財をテーマとして、いくつかあった候補から、私がこれに賛成した理由が、2つあります。まず1つは私ごとですけれども、高校のとき18歳まで弘前にずっと育ってきたわけですが、そのあと40年、他に移って、それでまた改めて40年後に帰ってきたときに、弘前ってこんなにすごい魅力があるのだと気づきました。例えば文化財にしろ、簡単に文化財、お城だけぐらいのイメージでいましたけど、縄文からずーっと脈々と昭和までですね、しっかりと文化財が残っていると聞いたことは、これはもう世界に誇れる弘前の財産だろうと思うのです。そこで育った人間がやっぱりこの文化財を理解して、誇りに思って生きていくということが非常に大事なのかなと思ったのがまず1つです。

それからもう1つが今、教育改革というものが非常に進んでいて、我々の頃は、とにかくこれぐらいの参考書でこれを暗記すれば、いい大学にいけるよといった詰め込み式の勉強というのが中心だったのですが、今はもうそれでは通用しなくなっている。コンピューターには勝てませんから。じゃあ何が求められるかというやっぱり、考える力だとか、自主性、主体性という言い方をしますけれども、自分で考えるっていうようなことが大事になって

くる。そうした場合に、その題材がなにかとなった場合にはやっぱり文化財がある。こんな身近に素晴らしい素材があるのであれば、それを活用してやれば、もっともっと広がるのではないか。教育が広がるのではないかなど考えたからです。まだまだもっと余地があるなど。

先ほど文化財課の方からの説明にもあったように、そういったことを教育委員会でも進めてきましたけども、やっぱり子どもたちの本当に主体性だとか、探究心だとか、これをもっと勉強したいなとかこれもっと知りたいなという興味をもっと刺激させるような、そういった取り組みが必要なのかなと思うのです。これは文化財にかかわらず、弘前には、その他にもいろいろなものが残っておりますので、そういったものをうまく引き出す方法はないかということで委員の先生にいろいろとお話を聞いて議論したいなど、こう思っております。

○市長（櫻田 宏） どうもありがとうございます。こういうご意見をいただきましたが、その他にも皆さんから、どんどん出していきましょう。

○教育委員（村谷 要） 冒頭市長から、東北屈指の文化というお話がありましたけれども、もう日本屈指のといっても良い位、やはり当市の文化財っていうのはいえると思うのですね。今、教育長からも話がありましたけれども、様々な文化財、要するに過去、現在、今、未来に向けてという素材を含め、非常に幅広くあるのが弘前だと思っています。

今回は教育委員会としてできる取り組みについて協議ということですので、文化財をどう使って、小中学校の子どもに向けていくかというところですけども、実は大人の私たちもよく知らないものがいっぱいあるのです。ほぼ知られてない、その分野の専門の人しか知らないみたいなものがたくさんあります。そういったものがたくさんある中で小中学校の子どもたちに興味を持ってもらうきっかけをどう作るかという、仕組みをどういうふうに教育委員会として作っていくかということはすごく大事であり、それを改善しながら、継続していくような仕組みづくりをぜひやっていただければと思っています。

例えばわかりやすいのが、私たちが小さい頃は身近に見えていたのです。私たちが子どものころはねふたといっても今みたいな形ではなく、町内だったり、近くにそういう団体があって、遊んでいて近づくと、いろいろ大人の人が教えてくれたり、宵宮に行ってもそうでした。例えば、私は第三大成小学校の学区なのですが、第三大成小学校の向かいに小野印刷があるのですが、その裏側は鶏を絞める場所だったのです。鶏が鳴いていると、子どものころよくそこを見に行つて、鶏を絞めるのをちょっとおっかなびっくりで見ていると、大人の業者の方が見ている子ども達に向けて、いろいろ説明をして

くれるのですよ。部位を分けて、焼き鳥を食べるだろう、鍋を食べるだろうって。そういう食べ物になるんだぞということを教えてもらいました。

そういうのは、小さい頃、普通に町の中にありました。楮町が今も大町の方にありますけどもあそこってそういうところだったのですよ。今も太鼓屋さんや剥製をつくっている会社があって。実は弘前は、町名自体が町印っていうのをつけておりまして、説明にも書いていますけども、それもきちっと残っていて、元々どういう町だったっていうのは見えてきます。ものすごく素材がたくさんあるのです。

配付された資料の中にも、今まで学校でやってきた取り組みっていうのが書かれているのですが、すごくいい取り組みできっかけづくりをされているなというのはわかるのです。ただ、これは点としてはあるのですけれども、これが線で繋がって、立体的に面で見えるような、そういう仕組みを作っていければなとすごく感じるところです。

例えばわかりやすい話でいうと、昔からこの地域には鉄の文化があります。1000年以上前からといわれていて、二唐さんという鍛冶屋さんが今も残っていますけれども、古くにはもっとありました。岩木山周辺には、製鉄の遺跡が100基以上出ており、そういった埋蔵物は、弘前市でも保管している。今でも鱒ヶ沢で製鉄炉の遺跡が1機だけ昔の形のまま保存しているので、鍛冶屋さんの若手の30代の職員さんたちと一緒に埋蔵物などを見に行ってきました。その前の日にちょうど、二唐さんで製鉄炉の清掃をしていたのを私も見ていたのですけども、そのときに鉄の塊みたいなものがいっぱい出てくるのです。それと同じものが埋蔵物にあるのです。埋蔵物の中に木で作られた道具もあるのですが、形状を見ると、今使っているものとほぼ変わらないのですよ。素材は変わったりしますけども、やっていることはそんなに変わらない。そういうものが見えてきたり、そういうものをもっと見せてあげると、面白い。子どもたちもわかりやすくなる。過去にそういうものがあって、今もそういうふうなのがあって、未来はじゃあどうなるのだろうというのが見えるような、そういう気づかせをしてあげて、興味を持ってもらおうっていうのをやることのできればよいと思う。

これはあらゆる分野でもできます。津軽塗然りこぎん刺しもそうですし、建築物もそうです。小中学生に前川國男さんの建築物をただ見せて、ル・コルビジェといってもピンとこないです。何がすごいのかという、バックヤードをきちっと、教えてあげればわかる。

数学の授業で、皆さんも習ったピタゴラスの定理ってあるじゃないですか。

三角形の直角三角形の。定理で暗記しなさい。Aの二乗+bの二乗=cの二乗みたいな。こういう定理だよ、覚えてきなさいだと興味が沸かないですよ

ね。私が中学生の時の先生で面白いと思ったのは、ちゃんと図を書いて、その辺の長さと同じ正方形を作って、柵目で切っていくって、これらをまとめてかぎすところなるだろうっていうところを見せてくれた。また、ピタゴラスの定理だけれど、ピタゴラスという人が考えたわけじゃなくて、その人の名前がついただけで、それはエジプトのころから、もうわかっていた定理なのだよということ。この定理を用いて石を削ってピラミッドが作られた。今も実はスポーツ医学の中でも使われていて、スポーツの競技の中でも例えばパスのときにコースとかを設定する際に使っている。もちろんパソコンの中でも使っている。という、話をしてくれた。

今ある文化財が、昔こういうのを作って今ここに残っている、なぜあるのかということ、わかりやすい事例などを見せてあげるようにして、興味を持ってもらうきっかけを作ると子ども達にとってすごく面白い話になるのかなと思います。

やっぱりそういう何かきっかけが必要だと思います。本当にたくさんの点が埋もれているので、それを1個1個つないであげてほしい。伝統工芸でいうと、津軽塗。400年前の築城で、全国からいろいろ職人が来てできたもので、もともと津軽塗があったわけじゃない。漆はあったけれど、そういう技法はそれまでなかった。それをやるためには木工の道具があったり、刃物があったり、いろいろ道具で、と全部繋がっている。要するにそういう職人さんの伝統工芸というのはいろいろ道具や技術が繋がっていたもの。それらを1個で独立するのではなくて、関係性があるって、といったことを辿るきっかけを、興味を持ってもらうきっかけを作ってもらいたい。

学校訪問をしてわかっているのですが、授業の中でとなると、先生にはやはり限界があるので、そこはその分野のプロが持っているノウハウや情報といったものをシェアリングすればよいと思う。先生が負担を持ってやるのではなくて、そういう方々の協力のできるような仕組みがあれば良いのではないかと思います。

わかり易いものを組み込んで、今あるものが過去のここから始まって、今こうなるっていうことが、繋がっていくような。それが今博物館で展示されている津軽家の話も、こういう史実だけじゃなく、それがどう繋がるというような仕組みを、子どもたちの分野にも持っていけるような仕組みづくりをぜひやっていただければと思います。

○教育長職務代理者（日景弥生） 先ほど吉田教育長が、いわゆる1回外に出てまた戻っていらしたってことを仰っていましたが、私は全く逆で、生まれが埼玉で、姉妹都市のうちの町は利根川をはさんで川向う側にあります。多分、こちらの方たちも行ったことがある方もいると思いますが、すごい数

の神社があるのですよ。田んぼや畑の真ん中に急に何だこれかと思って見てみると、徳川家とゆかりのある神社が周りの風景と場違いな感じであって、そういうところなのだと思って見ていました。事務局からの説明で当たり前になっているという話がありましたが、違う立場から見ると、私これとってもいいと思うのですよ。

当たり前って大事じゃないですか。むしろ、そういうものが本当に身近にあって、何というか生で触れられるとか肌で感じるというかな。そういうふうに感じられるということはもうそれだけで、学ぶ要素があると私は思っているのです。だから、決して当たり前は悪くないと、むしろいいことだととらえた方がいいのではないかと考えています。

資料でいただいている文化財マップなどはすごいですよね。情報によれば、市内の25の小学校がやっているとありました。ということはほとんど全部の小学校がやっているのではないかと考えるのです。そういう市ってあんまりないのではないかなと思うのですね。だから誇れるものだと思います。

それで、多分いくつかの学校は、何か理由があってできないのだと思うのです。もし可能ならば、こういうことをやっていない学校に、できない理由を挙げていただいたり、一方で、なさった学校には子どもたちにこんな効果があったっていうことをはっきり発表していただければ、もっと取り組み内容の具体化ができるかなあとと思いながら拝見していました。

こういった取り組みはいずれも、いわゆる小中学校だと総合的な学習の時間、高校になると探究の時間というふうに表現が変わるのですが、要するに子どもたち自身がみずから課題を設定して、それに向かって取り組んでまとめていき最後に発表というものになると思うのですね。

言い換えると、今日の協議事項の郷土を愛する心を醸成するためには、そのような探求する、やってみるという場面をどれだけ設定できるかにかかっているのではないかと私は思っています。

ですからこれについても可能ならば、市内の小中学校でマップに限らず、具体的にどんなことをやっていますか、何学年がどこでこういうことやっていますというリストを出していただければ、各学校は相当頑張っているのではないかと私は思います。なぜならこんな学習したいものまで出しちゃっているわけですからやっぱり活用しないわけにいかないと思うのです。むしろそこをデータとして出していただければ、もっとこんな活用する方法があるのではないかとということが、具体的に見えてくるように思います。

あわせて、令和6年度の教育に関する事務の管理及び執行状況の点検及び評価報告書というがありまして、これは昨年末のものですけれど、同じものが載っていて、2023年度は二重丸で、すごくいいのですね。2024年度につ

いてはまだ終わっていないので、出ていませんが、こんなことをやりますということや、2025年度もこういう方向でいきますということが書いてあるのです。

ですから、いろいろなデータを見ながらお考えになって書いてくださったと思いますので、同じような内容が、かなり繰り返し出てきているところもあったりするので、繰り返して出すということはやっぱり何かの事情があるのだと思います。だからそういうものをもう少し情報提供していただけると、私としてはお話しやすいなと思っています。

まとめると、やっぱり弘前そのものはもうすでに今日の課題提起のように、もう文化財に溢れていると。そういう中で子どもたちが自然に目に触れ、体験したりすると、それを学校という場面はもちろんです、もしかしたら、その地域とかそういうところでも、活用できるようなことをして行って、もし活用できない、何か理由があるならば、何かということを確認してもらいたい。

ただ一方で、ちょっと横に逸れますが、学校働き方改革検討会議をやっていて本当にわかることは、特に小学校は時間がないのです。先生たち自身がお茶も飲めないトイレにも行けないようです。そういう中で、もっと増やせというのは酷ですよ。だから今は、やっている中で少しリニューアルしたりとか、もうちょっと組み替えたり或いは少し上乘せをするとか、まずはできるところからやっていくということではないでしょうか。新たに何かを作るというのは、現状ではほぼ不可能に近いのではないかなあと考えています。

○市長（櫻田 宏） わかりました。先生方にあれもこれもという状況になっていると。子どもたち中心の視点を忘れないようにして、何ができるか、というところですね。

○教育委員（伊東 重豪） 私も吉田教育長のように、やはり子どもの頃ってなかなか、どうなのでしょうね。最近の若い人にしても少し文化財は担うというかですね、何か少し反発心を持つというか。1回出て帰ってくると、それが少しまた見方が変わってくるということはあると思うのです。

なぜそう最初は反発とか毛嫌いを覚えるかということについて、少し元を紐解いてくと、もともと日本人は、最近の日本人に関しては特に、国だとか、郷土に対する愛情とか、人間のバックボーンみたいなところがかなり希薄になってきていて、自分がこういった、日本に生まれてだとかこの津軽に生まれてこういう芯を持ったものであるということところがやっぱり少し薄いのかな、と思うのです。これはもう、現在の風土だから仕方がないのかもしれないですが、そこをもう少し刺激してあげられるような取り組みができれば良いので

はないかと思います。

あとは今、核家族化が進んでいて、昔でしたら伝統文化などは傳承されてきたわけですが、そういう機会がすごく希薄になっています。そういった傳承が少なくなっている中、学校をちょっと違うような使い方をして、ご老人の方々が入ってきて少しコミュニケーションしながらそういった機会を設けていく。それでまた弘前の魅力を再発見していただくということは、実験的に使える学校もあるわけですので、非常にすばらしい力になるのではないかと考えています。

弘前は観光都市でありますから、子どものころからそういった自分の観光文化財に触れてその魅力を知っていくことで、おそらく将来の産業発展にもかなり繋がって、さらに将来の弘前にも繋がると思います。やはり身近にあっても魅力を知らないとやっぱり取っつきがたいと思うのですね。弘前の文化財にはどういった魅力があるということを知ってもらうテーマが必要だと思っています。文化財マップを作るとかこのクイズ問題というのもすごくいい取り組みだなと思って見ていました。

先ほど日景委員が言ったように、この汲汲なシステムの中に時間をどうやってうまく入れていけばいいのかということが1つ課題だと思っています。参加している小学校と参加していない小学校を差別化して、どうしてそうなのかなということや、少し紐解いていくことが、また何かの糸口になるのかなと思います。参加している学校はいいのですが、参加していない学校はなぜできないのかということや、アンケートなどをとりながら、理由を探してみるのも1ついいと思っています。

すいません。取り止めのないことになってしまったのですが、私の方からはそういったところです。

○教育委員（齋藤 由紀子） 私は秋田県出身ですので、弘前に来まして、見るものすべてが新しく、弘前の文化財はとても素晴らしいなと思っています。まず、お城を最初に見たときはびっくりしました。そして学校訪問等で、本当に知らなかった、例えば材料ですとか、そういうところも伺わせていただいて、私自身、興味を持ちました。

村谷委員は、きっかけづくりが大事である。また大人も知らなければいけない。日景委員は、もっと小学校に負担を増やすのは大変だという話から、やはり保護者の出番といいますか、保護者も、頑張っていかなければいけないかなと思いました。

夏休み、冬休み前になりますと、博物館で親子鑑賞会というご案内をいただくのですが、こちらは、親子に限らず、保護者と子どもで参加すると保護者が無料になるということで、私はもうありがたくて参加させていただいてい

ます。親子で文化財について学ぶという機会になると思いますし、私も知らなかったことがたくさんありますし、子どもも博物館に足を運んで知るとい
う、とてもいい機会だと思いました。そこでいただいた前川國男建築カード
ですとか、縄文カード、イノッチが載ったカードですとか、そういうものをい
ただいて、さらに次の文化財を見に行ってみようというきっかけにもなりま
した。学校で進めていくのと並行して、ぜひ親子で一緒に文化財を回るとい
うことも、大事だなと思っています。

あと、二十歳の祭典で、市民会館について前川國男建築の説明があったの
もとてもよかったです。

○教育長（吉田 健） そうですね。

○教育委員（齋藤 由紀子） 壁の色っていうのをやっぱ知らなかった成人の方が
多かったんで、とても興味深く見ていらっしゃったので、あれは来年も、その
次も説明があればいいかなというふうに思いました。

○教育長（吉田 健） はい。本当に。照明がそうになっているとかね。それ、私も
わからなかったのですよ。

○市長（櫻田 宏） そうですね。そういうところに、歴史的なものといえます
か、文化財だけでなく、昭和のものがそうですね。

市民会館は 50 年経った時にリニューアルをして建築当時の状態にまた全
部直しているのです。昭和の時代としては、全国屈指のホールなのですよ。ス
テージに立って、マイクなしで話している声が一番後ろまで届くという。さ
すが音の前川というと、ここまですごいところはなかなか無かったから、コ
ンサートや舞台をやっている人たちもこの会場がいいのと選ばれていた。そ
ういうことが子どもたちに伝わっていけばいいですね。

その時代の歴史を学ぶ。私たちが詰め込められた、暗記するというのでは
なくて、身近なところに、そういうのがあるというふうに気づいていくとい
うことが、素材としてたくさん弘前にはあると思うわけです。もっともっと
うまく生かしていけばいいのかなという感じがしますね。

先ほど齋藤委員のお話の中に、親子で一緒に見ていくという話もでました。
親が知らない。親子で見て子どもが関心を示しているものを親が見ていくと
いう状態が話題としてまた家庭に入ってくるし、学校でもそういう話題にな
る。先生方も一緒に見ていく。無理なく、同じテーマでそれぞれの視点のこ
とをお話ししていただくといったことにもなっていくのかなと思う。

そうすると日景先生がおっしゃった通り、先生の負担が今増えている状況
でありますので、いかに負担ではない状態を、効率よくすることによってそ
れが軽減されていくということに繋がる仕組みができればいい。

○教育長（吉田 健） やっぱり、あれもやれこれもやれというふうなのは学校に

強いことはできないと思います。たくさん素材があるってということなので、逆になぜ受けられないかという話を伊藤委員からもお話ありましたけど、やっぱり小さいときってというのはそういう、すごいものをたくさん見ているのだけど、素通りですから。その中で自分が興味持つというか、数多くいろいろなものに触れさせるといことが大事なのかなと思います。

学校の先生だけに全部お任せするのではなくて、ゲストティーチャーだとか、先ほど話にもでたように地域の人とか親子とか、これに詳しい方が近所のおじいちゃんおばあちゃんにいますので、とかそういう方をどんどん活用できるような仕組みができればいいのかなあと私は感じました。

いや、文化財があるのは当たり前にあることも日景先生もおっしゃっていましたがけれども大いに結構なんですよね。何を本当に題材にしても面白いです。

この前、お城が趣味だということで私の友人が弘前に訪ねて来まして、その友人が語るには、いま日本には12のお城が現存しており、弘前もそのうちの1つだと、絶対こなきや駄目だと思って、見に来たというような話をしておりました。その中で、国宝はそのうち5つしかない。ではなぜ弘前城は国宝にならないのか、お堀も残っているし、という話をしました。これはすごく難しい問題で、これ高校生とか大学生とかが取り組んでもいいような大きいテーマにはなるのかな、政治とかいろいろなものが関わってくる。そういったものにやがて発展していくような話でした。

この冊子を作ったのも簡単な内容だけにあえてしているのですが、これをやってあれっ？と思ったら、これには書いてないことをいっぱい調べられるような、そういう仕組みになっていますよね。そういった形できっかけづくりがすごく大事なのかなあと感じましたね。これ面白いなと思ったらやっぱり、子どもたちは興味を持つのですよね。

これは文化財だけでなくでもいいと思うのですが、弘前は今、健康都市宣言やSDGsゼロカーボンに取り組んでいますけれども、例えば身近なところで、暖房器具、ほとんどのところは電気とか石油だと思うのですが、薪というのは非常にサステナブルだと言われていますよね。ではそれはなぜ？それを調べてみましょう、とやる。そのときに、何人かいるうちの2、3人は興味持つかもしれないけど、興味持たなくてもいいのですよ。だったら次の題材だ、とやってやると、それぞれが、これちょっと研究したいなとか、探求したいなと思えば、自分でテーマ、ピッとこう来たら、それを調べていくというのが大事なのかなと思いますね。だからとにかく題材を与えてやる。それはやっぱり、ゲストティーチャー、地域、親、子、そういったところかなというのが今、話を聞いてちょっと感じました。

各学校ではいろいろこういった地域学習は行っているの、学校指導課あたりには資料が集まっていますよね。やっていない学校なんてないですよ。

○学校指導課長（工藤 利彦） そうですね。

○教育長（吉田 健） ただ、やはりその時間のかけ方とか、そういったところは、各学校によって違います。それは違って構わないと思いますし、同じになる必要はないと思うのですが、ただやはり子どもたちのやる気だとか、探究心とか、なぜなのだろうとか、不思議に思うような、そういう気持ちを育てるために、どういうふうなことが必要なのかなというのは、必要か思うのですけどね。これでいいということはないと思うのです。いろいろことやってみなきゃならない。

○教育長職務代理者（日景弥生） 弘前に来て学校のことで、ああなるほどと思ったことがあります。

例えば、多分市内のすべての小学校や中学校でこぎん刺しをやっているのですよ。これはやっぱり1つの売りだと思います。すごいでしょ。それから、図工とか技術で版画をやっている。棟方志功の影響だと思うのですが、そういうのをやっているということは、ほとんどこれ全県かもしれないですね。

○教育長（吉田 健） そうですね。棟方志功展もあります。

○教育長職務代理者（日景弥生） 愛媛なんかだと、俳句をやっていますよね。俳句ポストとかいっぱいこうあってね。そういうものが、それぞれの地域の特徴だと思っています。でも弘前の今言ったようなものは、かなりの特徴ですごいなと思いましたね。版画はある程度どこでもやりますけど、ただあそこまで、版画のコンクールがあるというのは中々ないです。展示を見に行きましたけど、すごい力作が多いですよ。

○教育長（吉田 健） 美術展とかで市長賞とか教育長賞とかってありますよね。弘前は美術展っていうのを、ずっと伝統的に市でやっています。今年も今の時期、2月頭ぐらいには毎年やっています。

○教育長職務代理者（日景弥生） あと資料にはないですが、教育長から、もうそれは今必ずしもやらなくてもいいのだと、学校裁量だと言われたのがリンゴ。社会科かなんかで、リンゴの剪定だとか自分とか剪定とか、うちの子どものときも行ってきました。ラベルを貼って、最後に収穫するのだという。これはもう地域文化というより産業ですけれど、やっぱりシャインマスカットだとできないと思うのです。

○一同 そうですね。

○教育長（吉田 健） 昔はりんご畑がたくさんあったので、全員ができたと思うのですが、今は街中にりんご畑はなかったりするということで、それよりはねぶたの方に特化するという学校もあります。そこは地域に合わせて学校で

考えればいいということで、必修とすることはなるべく控えましょうという意図なのです。けれども、だから何もやりませんではなくて、それに代わったものを、やると。それを深めていく。リンゴをとにかく深めていく学校っていうのはもちろん。もう、船沢や東目屋や相馬とたくさんあり、販売までやっていますね。いろいろやっています。そうするともう街中の学校はもう太刀打ちできず、ローリングの事業に参加して、体験するぐらいしかできないのです。

○教育長職務代理者（日景弥生） 今のような各学校が頑張っていて、時間を捻出したたり先生たちも準備しながらやっていく中で、どんな成果があったかということが見えてこないように思うのです。つまり、学校の中ではある程度成果の共有ができて、学校を超えての情報共有とか情報発信ができてないのではないかと。

こういう大変さはあるのだけど、でもこういう成果があったと天秤にかけたとき、やっぱりやってよかったよねというふうになると多分次の年度もやるのだと思うのですね。そういうようなのをそれこそホームページでも何でもいいのですが何かできないのかなと思うのです。

○市長（櫻田 宏） 成果の発信ですよ。発信されてないのでやっているかどうかは伝わっていないという。これは、市役所全体にも言えるのですけど。

○教育長（吉田 健） 子どもたちの何か成果発表っていうのは、ホームページに載っていないですか。

○学校教育推進監（福田 真実） ホームページでの発信は確かに弱いですが、ただ、保護者向け、地域の方向けに学習発表会や参観日等では発表しています。

○教育長（吉田 健） もっと広くやった方が、子どもたちの意欲に繋がるのかもしれないですよ。

○教育委員（村谷 要） できれば子どもたちがホームページを作って、みんなでそれを発表の場で共有して使えるようなものがあればよいのでは。先生がサポートしなくても、市内の IT 企業のノウハウ、知識とかを使って構築するような形でできると思います。私が商工会議所にいた当時、ホームページの作成のコンクールを募集すると附属小学校とか石川小学校とか何校か、生徒さんと先生で申し込んできてですね、結構できる子どもも中にはいるし、そういうのを教えてくれる、IT の企業の講師を囲んでみんなでやるというような作りを含めるといいですね。

○市長（櫻田 宏） タブレットはもう使われているので、休み時間や授業などでどんどん活用していけばいいですね。

○教育委員（村谷 要） 先ほどマップって出ましたけど、インターネット上にマップが 1 つあると、この場所でこういうことやったという情報をそこに出せ

るようなものがたくさんあるといいですね。そこに定常化していけるようなもの、その場を1つ作ってあげるだけでね。

○教育長（吉田 健） やってみてそこに到達するっていうことになります。そんなに面倒なことではないかもしれないですね。

○教育委員（村谷 要） 全然そんなに難しくなくできると思います。先生が教えるのではなく、そういう企業の人にやってもらう。ホームページを作るときはこういうことができますよということを見せてもらい、その際に、インターネットを活用する際はこういうことやっちゃいけないよというところまでそういう人に教えてもらうような、そういう環境を作ってあげればいいと思います。

○教育長（吉田 健） 仕掛けは教育委員会がやるという。

○教育委員（村谷 要） そういう場所を1ヶ所作ってあげる。発表は割とそういう形で簡単に、子どもたちは面白くて、むしろどんどん参加しそうですね。

○市長（櫻田 宏） そうですね。

○教育長（吉田 健） 競い合って、あそこの学校がこんなことやっている、うちの学校も！と子ども達自身が思い、刺激し合う可能性が高いです。あそこの学校は強いな、うちは弱いなとか、小学生がそれだけのことをやっているなということは感覚的にはありません。中学校はちょっと勉強が忙しいということにはなるとは思いますね。

○教育委員（村谷 要） 先ほど教育長からもお話がありましたけど、例えばカーボンゼロなどのSDGsを含め、市の総合計画のもとやっぱり教育委員会も乗っかってできるものという、さっきの薪がすごく面白いと思うのですよ。今、生活の中で子どもたちが火を見なくなっていると思うのですが、木が燃えるという仕組みは薪ストーブを見るとすぐわかります。木が燃えるというのは繊維が燃えているわけではないのですよ。燃焼ガスが出て、ガスが発火して燃えるという仕組みもわかる。あるタイミングでポツと燃える。やはり火を見ないと。人類の一番最初の、発展の動きですから。

○教育長（吉田 健） そういった環境の問題は、専門家を呼んで、いろいろと指導してもらおうというのもよい。私も今話を聞いてはっと思ったのは、ちょっと前までは割り箸は、使い捨てだからよくないと言われていたけれども、それは間伐材などを使っているものだからむしろ使った方がいいと言われるようになった。それでもって森林破壊といったものなどは問題があるなどということ、専門家の方から話聞くということはやっぱ大切だと思います。そうすると箸の使い方とかマイ箸を持っていくとかといった話も出てくる。いろいろ題材は文化財に限らず、いっぱいありますので。

- 市長（櫻田 宏） そこに人々の生活あったのかということを知ることが大事ですよね。より身近にわかりやすくなるのかな。
- 教育委員（村谷 要） 生活そのものが文化なのですよね。そういう地域の資源、建物だけじゃなくて、空気水も、その資源なので、それを文化の中でどう使うか。
- 市長（櫻田 宏） 時間なので、2つ目の話題へ移します。市の事業はいろいろとあるなかで、先生方は忙しいというのは大前提でありますけれども、それを活用する学校が今固定化してきているということが、2つ目の課題となっています。いかに学校に活用してもらえるかといったことについて思っていることがあればお願いします。
- 教育委員（村谷 要） これまで働き方改革とかいろいろお話あった中で、固定化というものをどう変えるかという仕組みを作る必要があると思います。それとやはり今、市の総合計画の中でも、シェアリングシティーを目指すということも、部分的にも入ってきているではないですか。総務省でもそういうシェアリングをしていって、誰もがそういう知識だったり、労働時間だったりというあらゆるものをシェアしてやっていこうっていう考え。そういう考え方のもとで、それは教育についてはやっぱりやっていくべきだと思います。もう、どんどん少子化になり、教える人を含め、建物などもあらゆるものが迫ってきている中で、どう教育をみんな、地域で、自分の持っているノウハウや知識を含め、あるものはやっぱりシェアしてやっていくべきだと思います。
- これは決してボランティアで求めてはいけないと思うのですよ。きちっと有償で行うという仕組みを作って、市で今シェアリングでやっている雪片付けも、ボランティアではないですよ。
- 市長（櫻田 宏） ちゃんと有償にしました。
- 教育委員（村谷 要） そういうような流れを作らないと、ボランティアじゃ絶対前にいけないので。
- 市長（櫻田 宏） ボランティアの無償化ってずっと問題、課題でした。
- 教育委員（村谷 要） 無償化とボランティアって全然違うのですけどね。
- 市長（櫻田 宏） ボランティアは有償ですよということですよ。ボランティア、イコール無償というイメージを日本人は持っているのですけど、そもそもボランティアとは有償のボランティア。それが何でもばらまきの無償化が入り過ぎてしまったので、何でもタダでとやってくれると思われている。でも今回弘前市の間口除雪については1時間1500円ぐらいで大学生がアルバイトをするというものをスマホでマッチングしています。隣の家を除雪をボランティアでやるということは美しく聞こえるけれども、その家の人にとっては、お金を少しでも払った方が気持ちは楽だと言うそうです。

- 教育長（吉田 健） ただほど怖いものはないっていうことですよね。
- 市長（櫻田 宏） あその家はお酒をあげたからといって、うちはこれあげたからと、それでまた競争をして、逆に意味のないことになっていく。例えばもう単価いくらですという内容で市もやっておりますが、ご近所3軒ぐらいたを1時間で、間口ってそんなに大きくなければ、1時間かからないじゃないですか。2、3軒がまとまって、お願いをすれば、その分を全部やってくれて、金額を割り勘すると安くなるとかですね。そういうことをどんどん広めていきたいなと思います。
- 教育委員（村谷 要） 教育現場でもやられた方がいいと思うのですよ。いろいろなことが何でも先生におんぶにだっこである。
- 市長（櫻田 宏） 自分たちが親としてやるべきことは親としてだし、地域に暮らす人としてやるということは地域でやるという。
- 教育委員（村谷 要） そうなると予算化が必要になってくるので。
- 教育長（吉田 健） ぜひ予算が組まれたいですね。無償はやはり私は駄目だと思っています。額は少なくとも、何かお礼をするというか、そうでないとやはりお願いはできませんよね。
- 市長（櫻田 宏） りんごのアルバイトで人工授粉のボランティアを自衛隊がやったこともあったのですが、今はしっかりとデイワークという形で1時間いくらということになりました。アルバイトだと大学生達は、1時間だけアルバイトに行くという仕組みもコロナの時にできたのですよ。こんなふうは無償とは聞こえはいいのだけど、長くは続かない。続くためには仕組みにしていく、さっき言ったような仕組みなのですよ。
- 教育委員（村谷 要） そこでちょっとご提案したいのが、予算を作るために、いろいろ毎年予算が出ているので、例えばストーブは今年何台買い替えで何千万円かかる。食器にはいくら。とかいろいろなものがそういう形で出ているのですが、購入するのではなくて、リース或いは経費で、月ベースでもう固定化してしまうという考えです。IT関係は、毎月、全学校で幾らということをしきりと積み上げて、経費にしていく。もちろん償却しないというやり方でいくと、何千万円何千万円とぼんぼんと毎年出るよりは、そこで浮いた分を、教育の部分で一番大事なところの予算に回すような仕組みをぜひ検討していただければなと思います。
- 市長（櫻田 宏） どんどん技術も新しくなっていくなかで、買ってしまっただけもうそれが古くなるだけですものね。
- 教育委員（村谷 要） その5年というリース期間で、次に買い換えるとき、最新の値段はそんなに変わらないですよ、まず。最近のパソコンなどを見てもそうですけども、そんなに値段は変わってこないの、どんどんやっぱり新

しい機能のいいものを子どもたちに、提供できるような仕組みをぜひ取り入れていただきたい。

○市長（櫻田 宏） 市の事業を活用する学校の固定化というよりも、学校の方でやりたいということを市の予算も柔軟に対応できるような線に変えていけばいい。

○教育委員（村谷 要） そうするといろいろシェアの仕組みにも対応できるようになっていくと思います。なぜかというと、たしか、もう今の補助金もそういうものに対応するようになっているはずなので。リースにも対応するわけですから。

○市長（櫻田 宏） 今弘前は観光の環境整備をどんどんやっていて、ガイド学校を立ち上げたのですが、養成だけではなくて卒業後の仕事まで準備するという、トータルでの仕組みを作りました。全国でそこまでやっているところはないので、観光庁からは今 10 分の 10 の補助事業が取れるかもしれない。こういう仕組みでやっているということをおある会議で出したら、ちょっと説明してくれというのでうちの職員が観光庁まで行って話をしたらですね、それが補助制度になるというか、10 分の 10 のモデルケースにはなるのですが、2000 万つくという話が出てきています。

そういうことができる、教育現場も文科省の考えでそういうことになってくるので、補助事業ができたのに手を上げるのではなくて、こういうことをやっているということをお向こうにアピールすると、それが補助事業になっていくという。こういう予算の獲得の仕方をしていかないと、なかなかお金は回ってこないと思うのです。

こうした主体というものをたくさんできれば、それをどうすれば仕組みになるかということをおしっかりと考えて、次はモデルケースで自分たちがやるのだという話をすると、それを文科省としてもやっていきたいと思います。

自衛隊では 56 歳で退職しているため、元隊員をいろいろ現場で活用する。地域公共交通の担い手がないので、バスの運転手をやってくれる。自治体と自衛隊がマッチングしたことは、全国で初めてのパフォーマンスだったため、もう全国の自衛隊から、弘前ではそういうことやったと聞いたという問い合わせがありますし、もう全国の仕組みになるわけですよ。

○教育委員（伊東 重豪） 自衛隊の方は本当にあの若い年代でやめて有り余っているエネルギーというか、まだまだずっと人生がありますからね。すごくいい仕組みづくりですよ。

○市長（櫻田 宏） 弘南バスに聞くと、56 歳は若い方ですとのことでした。体調さえよければ 70 歳でも普通に運転してもらっているそうです。そうすると

56歳からだあと15年は働いているわけですよ。

- 教育委員（伊東 重豪） 今の運送業界とかの本当に人手不足にはやっぱ救世主になり得ますからね。
- 市長（櫻田 宏） 市の事業を活用してもらってないということよりも、活用したい事業が上がってくるような、そこに市が予算をつけ、柔軟な予算の枠を取っていくっていいのかなと思います。それぞれの学校の特徴に合わせて、そういう補助制度にしていく方がいいと思います。事務方が大変になるのですが。学校現場から意見を聞いていく必要があると思います。
- 教育委員（伊東 重豪） 市長も仰っていましたが、新たなプロジェクトを作ってそれを予算要求に上げてくるというような意欲が出てくるかと思います。いい形じゃないですかね。
- 教育長（吉田 健） 新たな視点で教育の事業を立ち上げないと、なかなか予算獲得までにはいかないということだと思います。それが結局は子どもたちに返ってくるということですね。貴重な意見がいっぱい聞けました。すぐにでも取り入れなきゃならない。見えてきました。
- 市長（櫻田 宏） 予算の話は相談受けて、もし必要があれば年度の途中で補正予算というのをやりますので、年度途中からでもちょっとモデルケースで、例えば10月から取り組んでみたいというのであれば、6月議会で補正をかけてもらいたい。どんどん案等が出たら、それを1年待つということはない。仕組みを作り上げて、予算要求をして、補正予算出すときは議会でしっかりと議論しているわけですから。徹底的に議論をして可決してもらってから執行した方がいいものになるのですね。そういうのに脱却していきましょう。最後にこの言葉だけ。固定化からの脱却だけを提供します。
- 教育部長（成田 正彦） それでは、これをもちまして、令和6年度総合教育会議を終了とさせていただきます。我々も既存の事業の中でいろいろ工夫をしながら、より子どもや学校が使えるような事業を進めていくようにと教育長の方から常々言われております。弘前市長からも、場合によっては補正予算をとという心強い言葉をいただきましたので、そういったところも取り組んでいければと思いますので、今後ともよろしく願いいたします。
これで終了させていただきます。お疲れ様でした。

午後4時10分 閉会